高 校
の事例

# 卒業後の生活を想定した進路支援の大切さ

～高校は、頼ってもよい大人と出会える最後のチャンスかも～

## ― 関わった世帯の状況

**Ｃさん：高校３年生の女子。就職希望。療育手帳あり。**
**生活費などの金銭管理、母の体調管理やメンタルケア、弟の登校支援などを行っている。**
**家　族：母と弟（小学３年生）。母と弟も療育手帳あり。生活保護世帯。要対協の支援世帯。**

## ― 支援のきっかけは？

**SSW**

本校には、一般的な進路指導に加えて、卒業後の生活環境が懸念されるため事前に支援調整を行う必要がある生徒が一定数いました。このため、SSW とキャリア教育コーディネーターから進路部長に「支援×進路会議」の開催を提案しました。１回目の会議（５月開催）では、３年生の各担任から支援が必要だと思われる生徒を挙げていただいたところ、その中の一人がＣさんでした。就職希望だったのですが、このまま自宅にいてケアを担いながら就職したとしても働き続けることが難しいのではないか、と思いました。

**教育相談コーディネーター**

入学当初からＣさんが担任教諭に『母や弟の世話がしんどい』などと話していたこともあり、担任教諭から「支援×進路会議」で支援が必要だと思われる生徒として報告され、Ｃさんの支援がスタートしました。

## ― どのような支援をされたのでしょうか？

**SSW**

Ｃさんが自身の人生を歩んでいくには、母と弟に対する外部からのサポートがカギになると考えました。そこで、要対協で拡大ケース会議を開催してもらい、関係者が集まり、Ｃさんを含めての全体把握と高校の役割を確認しました。
その後、担任教諭、キャリア教育コーディネーターと一緒にＣさんと面談し、卒業後の意向を確認。併せてグループホームへの入所などの福祉サービスについて説明しました。母にも同様の説明をするとともに、Ｃさんと相談支援専門員との顔合わせを実施。その後は「支援×進路会議」で定期的に進捗管理することで、支援が具体的になりました。

**支援内容**

- 「支援×進路会議」に関係者が集まり、アセスメントとプランニングを実施
  <プランニングの内容>
  **Ｃさんや世帯のご意向を確認、尊重する**
  Ｃさんの就職を支援する
  Ｃさんの自立をめざし、グループホームに入居できるよう支援する
  Ｃさんが卒業後に地域に頼れる人（相談支援専門員など）をつくる
  Ｃさんが安心して自立（就職、グループホームへの入居）できるよう母や弟にも支援を入れる
- 要対協の拡大ケース会議で、母と弟への支援を検討
  弟への支援は小学校が、世帯への支援は子育て支援課（事務局）が検討

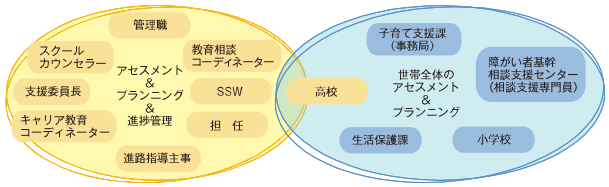
5月～3月

**支援後**

世帯への支援内容が明確になり、Ｃさんが安心して自立できる環境が整った

- Ｃさん：就職し、自宅近くのグループホームに入居
- 弟：遅刻しがちであったが、登校支援が入り、改善がみられた
- 世帯：ヘルパーが派遣され生活環境が改善された

＜校内の支援体制：「支援 × 進路会議」＞　＜要対協の拡大ケース会議：母と弟への支援を検討＞




＜役割分担＞

- ケース会議後のおおまかな役割分担
  高　校：本人の意向確認と進路への支援
  小学校：弟の登校支援を検討
  基幹相談支援センター：卒業後のグループホームへの入居を支援
- 校内の役割分担
  進路指導主事：就職支援、就職が決まってからは就職先との調整
  SSW：福祉機関との連絡・調整
  担任・養護教諭：困りごとの確認、精神的なフォロー

## ― 支援のポイントを教えてください

**進路指導主事**

「支援×進路会議」を定期的に実施し、情報共有・進捗管理をすることで、つながっていると思っていた支援先とＣさんの関係が途絶えていたことがわかり、再度、学校が仲介しつなぎなおすことで、支援に結びつけることができました。

**教育相談コーディネーター**

要対協の拡大ケース会議の開催により、母と弟に対する支援が導入されたことで、Ｃさん自身も安心し、自分の将来のことを考えられるようになったことも大きかったと思います。

**SSW**

Ｃさんが担任教諭をはじめとした信頼できる大人と学校の中で出会えたことが本当によかったです。そのうえで、学校関係者だけでなく、様々な専門知識を持つ大人が定期的にＣさんに接し、声を掛け続けることで、『自分のことを気にしてくれる人がいる』とＣさんが気づくことができました。

## ― ご世帯に関わって感じたことを教えてください

**教育相談コーディネーター**

生徒の想いをしっかりと聴き取るには、まずは生徒と教諭間の信頼関係が大切だと改めて実感しました。

**進路指導主事**

「支援 × 進路会議」の開催により、Ｃさんのケースに対応できたことで、『卒業したら終わり』ではなく、生徒の将来までを見据えた進路指導が大切だと強く感じました。

**SSW**

進路選択などの場面で、家庭内でのサポートが弱い子どもたちがいますが、学校では、その不足を “サポートしてくれる大人” “頼ってもよい大人” に出会うことができます。特に、高校は卒業後の進路が進学や就職などバラバラで、ひょっとしたら、“頼ってもよい大人”と出会える最後のチャンスかもしれません。今回Ｃさんを支援できたことで、「支援×進路会議」のような卒業後の生活を想定した進路支援の大切さをより多くの高校に伝えたいと思いました。

### 学校の中の「居場所」

コラム３

少し事例から離れますが、学校の中の「居場所」についてご紹介します。
ある府立高校の学校内「居場所」（課題を抱える生徒フォローアップ事業）では、放課後になると生徒たちが次々とやってきて、自分の好きなことをしながら思い思いに過ごしています。友達と話をしたりゲームをしたりする生徒もいれば、スタッフに話を聞いてもらっている生徒もいます。どの生徒も、自分の好きなことをして、ここでは自分らしく過ごせている様子がうかがえます。
「居場所」を「相談窓口」とネーミングすると生徒の心のハードルが高くなるようなので、様々な工夫を凝らしています。スタッフは一緒にお菓子を食べたりお茶を飲んだりしながら、さりげない会話の中で困りごとを聞いたり、困りごとを言語化するお手伝いをしています。
生徒たちが帰れば、スタッフで振り返りを行い、支援が必要な生徒がいれば、教員や SSW と連携し、関係機関へとつなぐこともあります。
子どもたちが家族の世話をしていたとしても、家庭内のことであるため表面化しにくく、本人に自覚がなかったり相談をすることをためらうことがあるかもしれませんが、「居場所」には子どもたちの話を聴いてくれる大人がいます。
教室や部活動以外で子どもたちの「居場所」が学校の中にあるって素敵ですね。

大阪府教育庁が実施する「課題を抱える生徒フォローアップ事業」は、民間支援団体（NPO 等）と連携し、課題を抱える生徒を早期発見すること、外部人材を活用し関係機関につなげることを目的として、府立高校 15 校（令和５年度）に「居場所」を設置しています。